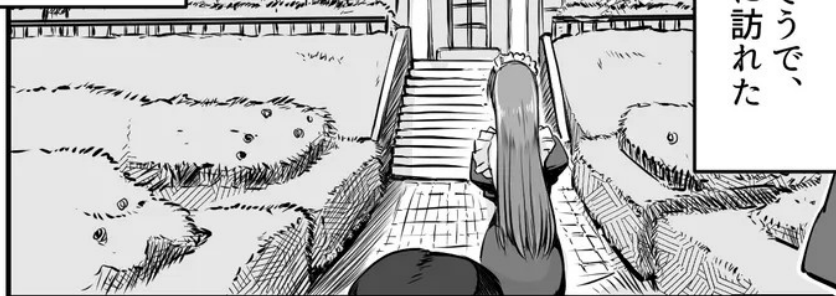


遥と初めて会ったのは
親父の遺産で譲り受けた
屋敷に来てすぐの事だ

彼女は親父の使用人だったそうで、
俺の下で働きたいと私の元に訪れた

近く人を雇う予定だった
ので、しばらく泊めて
様子を見る事にした



今にして思うと、私は
その時すでに一目惚れ
してたのかもしれない

清楚な立ち振る舞いで、時折見せる仕草が愛らしい
魅力的な女性：だと思っていた、あの時までには。



ある日、部屋に訪れた遙に
私は突然押し倒された

ご主人さまっ
もっ……

もっともっ
突いてっ……
ケツ穴たくさん突いて！

ご主人様のおちんぽ
大好きですっ……！！

今まで見せた佇まいなど何処吹く
風で、嬉々として淫猥な表情を浮かべた
彼女は私の体を無我夢中で貪った

重度のラバーフェチな彼女は
メイド服の下にラバースーツ
を来ているそうで、この時も
その格好のまま行為は続いた



遥との壮絶な破廉恥劇は、どっぶり
深夜にかけてようやく落ち着いた

彼女は何も語らず、従順な
態度でいつものように
尽くしてくれているが…

ん…

はぁ…
ちゅぽ…

後に親父が抱いていたメイドなのだと知り
なんとも複雑な気持ちで、遥と私との
よくわからない自堕落ライフは始まった



「
ところで、エッチの時に
カチューニャはとろなの？」

フンスッ

これは私の
アイデンティティなから！

「
あっ……えう。」

